

学位論文題名

十八世紀ドイツ思想と秘儀結社—カントとフィヒテの場合

学位論文内容の要旨

〔形式〕本論文は、「はじめに」、「序論」、「第一編」、「第二篇」、「おわりに」、「関連年表」、「索引(人名、「秘儀結社等」、書名)」により構成され、A5版、縦書き、全349ページである。一ページは936字であり、400字詰原稿用紙に換算して約800枚に相当する。

〔内容〕本論文における著者の意図は、十八世紀後半におけるドイツ思想の形成に対する「秘儀結社」の意義を、それに対して対照的な立場を取った二人の哲学者、すなわち代表的な秘儀結社の一つである「フリーメースンリィ」に対して一定の理解を示しながらも、決して結社に加わろうとはしなかったカントと、死に至るまで真のフリーメースンたろうとしたフィヒテに即して明らかにすることである。一般に、十八世紀後半のドイツは、「啓蒙の時代」「批判の時代」とみなされることが多いが、しかし、啓蒙や自律が強調されるということは、同時に、その時代がそれほど自律的でも批判的でもなかったということの意味する。著者は、こうした「感傷の時代」において、当時のドイツ思想に対して無視できない影響力を持っていたのがさまざまな「秘儀結社」である、と指摘する。しかし、従来の哲学研究においては、この点が省みられることはほとんどなかった。この間隙を埋めることによって、ドイツ啓蒙思想およびドイツ観念論をより深い背景から理解すること、これが本論文における著者の意図である。

本論文は、大きく「序論」、「第一編」、「第二篇」の三部に分かれる。まず序論においては、十八世紀後半のドイツの時代状況における思想の特質と、「秘儀結社」の歴史ならびに現状が検討され、文化的・政治的な後進地域であったドイツにおいて自律が強調されざるをえなかったゆえんが明らかにされる。また著者は、多くの先行研究を参照しながら、50ページほどを費やして、欧米の「秘儀結社」の歴史と形態を整理し、本論文の主題に係わる十八世紀ドイツにおけるその実情を詳細に論じている。序論のこの部分は、とりわけまとまった「秘儀結社」研究の少ない我が国においては、それに対する貴重な概観を与えているものと評価することができる。

第一編では、カントと「秘儀結社」、とりわけ「フリーメースンリィ」との思想的連関が問われる。カントの生地ケーニヒスベルクの「どくろと不死鳥」というロッジには、1933年まで百年以上にわたってカントの肖像画が掲げられていたという。このことは、カントが生涯結社には加わらなかったにもかかわらず、フリーメースンリィの側からはきわめて高い評価を受けていたことを意味する。しかし、当時多くの思想家がフリーメースンとなっていたなかで、カントが結社に加わらなかったには、それなりの思想的理由があったはずであり、それは「自律」という啓蒙思想の中心をなす概念に関する根本的な理解の相違であった、と考えられるべきであろう。こうした観点に基づいて著者は、カントの著作から、決して多くはない「秘儀結社」観を取り出し、分析する。

論証の詳細は省くが、結論はこうである。すなわち、確かにカントは、当時合理的フリーメースンの理論的拠点であった『ベルリン月報』に15編もの論文を寄稿し、彼らの活動に一定の協力を行っている。それは、「世界公民性」や「兄弟愛」などのフリーメースンリィ思想に対する共感からであった、と著者は推測する。しかし、カントにとって、人間に対す

る信頼の支えとなったのはあくまでも「自律性」であり、それへの導き手としての「理性」であった。こうしたカントの哲学から見るならば、「秘儀結社」への傾斜は、「自由」と「自律」を基にした「個」の尊厳を損ない、「直観」や「感情」にすぎることによって「理性」の権威を傷つける悪しき「信仰」に他ならない。それゆえにこそ、カントは彼らに対して一定の協力は惜しまなかったにしても、決して「結社」の一員たろうとはしなかったのである。カントに「秘儀結社」を忌避させたもの、それは徹底した「理性」と「自律」の尊重であり、カントはまさに「理性と自律の殉教者」であった、と著者は結論している。

もちろん、この結論自体は目新しいものではない。しかし、その「秘儀結社」観を詳細に分析することによって、著者は、カントの自律思想の深い背景を理解させることに成功している、と評価することができる。

第二篇では、カント哲学の継承・発展を自指しながらも、カントとは異なり、生涯「真のフリーメースン」たろうとしたフィヒテと「秘儀結社」との思想的関連が問われる。フィヒテは、早くから、人間性の完成を目指すフリーメースンリーの理想に共鳴し、無神論論争によって大学の職を追われた一時期には、実際にベルリンの「ロイヤル・ヨーク」ロッジに加入している。人間の道徳的完成や倫理的純化は、フィヒテ哲学を貫く基本モチーフであるが、彼はそれをまさにロッジに託したのである。著者はここで、従来の哲学研究においてあまり省みられることのなかった文献を駆使して、フィヒテ哲学の発展をフリーメースンリー思想との連関において見るという視点を提示し、それを論証しようとしている。

もっとも、こうしたフィヒテの理想は直ちに破綻をきたすのであるが、しかし、現実のロッジのあり方に絶望を繰り返しながらも、彼はフリーメースンリーに夢を託すことをやめなかった。著者の指摘によれば、こうしたフリーメースンリーの「理想化」には、すでにレッシングという先駆者がいた。すなわち、レッシングによれば、フリーメースンリーの思想や理念はあくまでも「理想」にすぎない。だが、理想はたんなる夢や幻ではなく、いつかは実現されなければならない。フリーメースンリーが「人類教化のための機関」なり「人間性育成のための学校」たる可能性を有しているならば、まして遅れたドイツにはそれ以外にその望みを託しうるものがないとするならば、この結社は理想を実現するための中核とならなければならないのである。フィヒテは、その『ドイツ国民に告ぐ』という演説から、ともすれば国粹主義的に理解されがちである。しかし、著者も指摘するように、彼が生涯真のフリーメースンたろうとしていたとすれば、彼が目指していたものは、決して独りよがりなドイツ精神の高揚ではなく、むしろ、すぐれたドイツ文化への自負を思い起こさせることで、人々をより豊かな「世界市民」たらしめることであった、と言うべきであろう。著者によれば、知識学を中心としたフィヒテ哲学にこのような広がりや深みを与えたものこそが、フマニテートを軸としたフリーメースンリーの精神であった。十八世紀後半の自覚的なドイツ人にとって、フリーメースンリーは「理想主義(Idealismus)」の一つの表現であり、その哲学的な表現がフィヒテの「観念論(Idealismus)」である、というのが著者の結論である。

以上、ドイツ啓蒙思想とドイツ観念論を秘儀結社思想の背景のもとで理解することの重要性を指摘し、カントとフィヒテに即してそれを具体化したことは、本論文の大きな功績と認めることができる。

学位論文審査の要旨

主査	教授	田中	亨英
副査	教授	新田	孝彦
副査	教授	山田	貞三
副査	助教授	石原	次郎

学位論文題名

十八世紀ドイツ思想と秘儀結社－カントとフィヒテの場合

本委員会は上記の申請論文を審査するにあたり、思想史的研究としての本論文の性格に鑑みて、思想史的資料の取り扱いとその分析、および哲学研究に対する貢献という点に焦点を当てて検討することにした。すなわち、思想史的資料の取り扱いと分析に関しては、各章ごとに使用されている資料が適切であるか否か、新たな研究資料をどれほど発掘し、それをどのように分析しているかが検討課題となり、その哲学研究に対する貢献に関しては、本論文が従来のドイツ啓蒙思想やドイツ観念論研究にどのような寄与をなしうるかが問題となる。以下、それらの検討結果と委員会の評価を、要点を絞って説明する。

まず、思想史的資料の取り扱いとその分析であるが、十八世紀ドイツの思想状況一般と秘儀結社との連関を論じた序論では、従来哲学研究者の間ではほとんど知られていなかった資料が数多く使用されている。一例を挙げれば、“Freemasonry. Early Sources on Microfiche. 1717~1879. From the Grand Lodge Library in The Hague”は、著者が長年かけて入手したものであり、あるいは「ドイツ・フリーメースンリイ博物館」の文献目録“Deutsche Freimaurer Bibliothek”などは、著者自ら発掘したものであると言ってよいであろう。また著者は、序論において、哲学研究書のみならず、歴史学や文化人類学などの研究成果を活用することによって、十八世紀に至るまでの秘儀結社の歴史と形態を概観し、当時のドイツ思想との連関を追跡している。これは、とりわけまとまった秘儀結社研究の少ない我が国においては、貴重な研究成果であると評価することができる。さらに、第一編と第二篇では、カントとフィヒテという二人の哲学者と秘儀結社の思想的連関が論じられるが、ここでも著者は、従来の哲学研究においてはほとんど注目されることのなかった諸論考を取り上げ、それを丹念に読解することによって、彼らの秘儀結社観を明らかにすることに成功している。しかもそこでは、現代の哲学研究ではもはや独立して論じられることのない群小の哲学者たちについても手際よくまとめられており、これは著者の思想史研究家としての堅実な手腕を示すものである。

次に、本論文が哲学研究に対してどのような貢献をなしうるかという点であるが、

著者はまず、十八世紀ドイツの思想状況において秘儀結社が持っていた意義に注目すべきであると主張する。当時の有力な思想家たちの多くはフリーメースンリィに属していたからであり、また時代が非自律的であったからこそ、自律や啓蒙が強調されざるをえなかったのだからである。それでは、なぜカントは当時の思想界においてほとんど唯一フリーメースンリィに加入しなかったのか。たんに啓蒙や自律を重視したからというだけでは答えにはならない。なぜなら、フリーメースンリィは当時のドイツにおいて啓蒙運動の中心的な担い手だったからであり、しかもフリーメースンリィの側では、カントを自陣営の一員とさえみなしていたのである。「自律」という啓蒙思想の中心をなす概念に関して、両者の間にはどのような理解の相違があったのか。著者はこの問いに対して、理性と感性、個人と集団という二つの対概念を軸にして、カントとフリーメースンリィの位置を確定することによって、答えようとする。これは、カントの自律思想を、当時の思想状況の中で浮き彫りにする試みである。またフィヒテに関して言えば、彼はカント哲学の継承・発展を目指しながらも、フリーメースンリィに対しては対照的な立場をとった。では、なぜフィヒテは生涯真のフリーメースンたろうとしたのか。この問いに対しても著者は、フィヒテ哲学の研究においてほとんど省みられることのない著作を手がかりにして、フリーメースンリィへの傾斜をフィヒテ哲学内部の発展という視点から分析している。著者は、レッシングを先駆者とするドイツ理想主義の展開過程にフィヒテを位置づけ、その解明を図っているが、当時のドイツ人にとってフリーメースンリィは理想主義(Idealismus)の一つの表現であり、その哲学的表現がフィヒテの観念論(Idealismus)であるという著者の指摘は、ドイツ観念論研究に新たな視点を導入したものと評価することができる。

以上、本論文は、十八世紀ドイツ思想を秘儀結社との連関において論じたものとして、我が国において唯一のまとまった研究であり、ドイツ啓蒙思想やドイツ観念論を、それ自体合理性と非合理性の間で揺れ動いていた秘儀結社思想の背景のもとで理解することの重要性を指摘したことは、思想史研究に新たな考察の視点を導入したものであるとして、高く評価することができる。